

モモの新品種 ‘岡山PEH7号’

日原 誠介・田村 隆行

A New Peach Cultivar ‘Okayama PEH7 go’

Seisuke Hihara and Takayuki Tamura

緒言

岡山県のモモは、古くから果皮が着色しにくい白桃系の品種が栽培されており、現在‘岡山白桃’の名でブランド化を図っている。岡山県は、白いモモを連続して出荷する‘岡山白桃’のシリーズ化を計る目的で、早生から極晩生まで、果皮着色が少なく、生産が安定し、品質良好なモモ新品種の育成に取り組んでいる。その結果、早生については‘さきがけはくとう’（日原ら，2012）、中晩生では‘おかやま夢白桃’（笹邊ら，2005）、晩生では‘白麗’をそれぞれ育成してきた（笹邊ら，2001）。

一方、極晩生では‘白麗’の枝変わりから‘新白麗’を育成したものの（笹邊ら，2008）、この品種は渋味が発生しやすく、果実品質が劣ることからあまり普及していない。そのため、岡山県では極晩生のうち8月下旬に収穫可能な白いモモの優れた品種が少なく、市場の需要を満たせていない。

また、岡山県で栽培されるモモ品種は一般的に肉質がち密で軟らかく、多汁質であるが、現在栽培されている極晩生品種は果実が硬いことから、食味の優れた極晩生品種の開発が強く望まれている。

そこで当研究所では、果皮着色が少なく、果実品質の優れた極晩生品種を育成するため選抜を行ってきたが、このたび、岡山県南部で8月下旬に収穫可能な極晩生のモモ新品種‘岡山PEH7号’を育成したので、その育成経過と特性の概要を報告する。

なお、本品種の育成にあたっては、（独）農研機構果樹研究所等関係機関の各位から多大のご助言とご協力をいただいた。ここに深甚なる感謝の意を表する。

育成経過

‘岡山PEH7号’は、岡山県農林水産総合センター農業研究所（旧 岡山県農業総合センター農業試験場）で、‘おかやま夢白桃’に‘白麗’を交配して育成した交雑実生から選抜された（図1）。

種子親の‘おかやま夢白桃’は、当研究所において、‘うー9’と‘山根白桃’の交雑によって育成された栽培特性の優れた豊産性の中晩生品種で、生理的落果が少なく花粉を有しない。一方、花粉親の‘白麗’は、岡山県の農家が‘大久保’に‘肥城桃’を交配し、当研究所が選抜育成した晩生品種で、果皮着色が少なく、果実品質や食味は優れているものの、生理的落果が多く、収量が不安定になる欠点を持っている。

そこで、果皮着色が少なく、果実品質の優れ、しかも生産が安定する極晩生品種を育成する目的で、2003年春に両品種の交配を行った。そして、交雑して得られた種子から成熟期に胚を取り出し、種皮を取り除いて3℃の低温で保存した。これを、同年秋に播種し、交雑実生19個体を得て、春まで温室内で養成した。

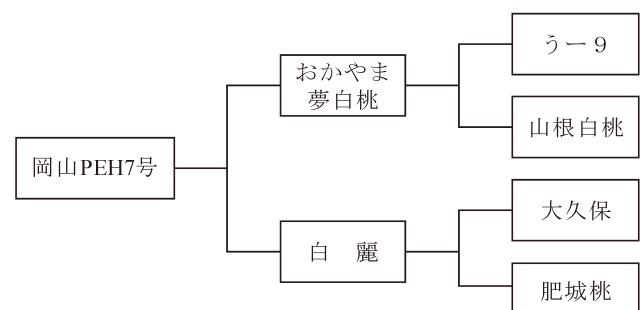


図1 ‘岡山PEH7号’の系譜

2004年から育成19個体を育種圃場に定植し、2006年に初結実した。その後、1次選抜試験を継続した結果、個体番号‘3-32-6’が有望と判定されたため、2010年から‘岡山モモ11号’の系統名を付して、複製個体を作成し、2次選抜試験を実施した。その結果、他の極晩生品種に比べて果汁糖度が高く、果実品質に優れ、果皮着色も少ない有望な系統と認められたことから、2014年2月に種苗法に基づく品種登録を出願申請し、2014年7月に‘岡山PEH7号’の品種名で出願公表された(第28903号)。

品種特性

1. 試験方法

‘岡山PEH7号’の品種特性については、昭和52年度種苗特性分類調査報告書〔モモ(毛桃)](岡山農試, 1978)並びに育成系統適応性検定試験・特性検定試験調査方法(果樹研究所, 2007)の調査基準にしたがって特性調査を行った。育成地において、筑波5号台木に接木した‘岡山PEH7号’の複製樹を2010年に2本、2011年に‘新白麗’、‘初秋白桃’と共に各品種5本ずつ圃場に植栽し、2012~2013年の2年間無底オレンジ

袋を掛けた有袋栽培を行って、樹性、開花特性、果実特性、果実品質、結実特性、食味官能評価について比較調査を行った。しかし、年によって複製樹の調査個体数が異なるため、統計解析は行わなかった。

2. 結果及び考察

(1)樹性

樹姿は‘新白麗’より立性のやや直立で、樹勢は強く、樹の大きさは‘新白麗’と同じ大である(写真1)。枝の太さは中程度で、着果枝の着色は‘新白麗’と同程度の中である。葉身の長さは‘新白麗’と同様に長く、葉身の幅は中程度で、蜜腺は円形をしている(表1)。

(2)開花特性

花の咲き型は普通咲で、‘新白麗’より花弁は小さく、広楕円形をしており、花色は‘新白麗’より濃い濃桃色である。開花期は‘新白麗’より2日程度早く、育成地(赤磐市)においては4月上旬に開花し、‘新白麗’と同様花粉を持っている(表2, 写真2)。

(3)果実特性

果形は‘初秋白桃’と同じ扁円形で、果頂部の形は平、梗あいの深さは深い。有袋栽培における果皮着色は微で、‘新白麗’より少なく、果肉の色は乳白で、果



写真1 ‘岡山PEH7号’の樹姿(複製樹)



左：新白麗 中：岡山PEH7号 右：初秋白桃

写真2 花の比較

表1 ‘岡山PEH7号’の樹性

| 品種名 | 樹姿 | 樹勢 | 樹の 大きさ | 枝の 太さ | 着果枝 の着色 | 葉身 の長さ | 葉身 の幅 | 蜜腺 の形 |
|---------|------|----|-----------|----------|------------|-----------|----------|----------|
| 岡山PEH7号 | やや直立 | 強 | 大 | 中 | 中 | 長 | 中 | 円形 |
| 新白麗 | 斜上 | 強 | 大 | 中 | 中 | 長 | 中 | 円形 |
| 初秋白桃 | 開帳 | 強 | 大 | 中 | 中 | 長 | 中 | 腎臓形 |

表2 ‘岡山PEH7号’の開花特性

| 品種名 | 花芽 | | 開花盛期 ^z (月・日) | 花の 咲き型 | 花弁の 大きさ | 花弁の 形 | 花色 | 花粉 有無 |
|---------|----|-----|----------------------------|-----------|------------|----------|----|----------|
| | 粗密 | 着き方 | | | | | | |
| 岡山PEH7号 | 密 | 複 | 4.7 | 普通咲 | 小 | 広楕円形 | 濃桃 | 有 |
| 新白麗 | 密 | 複 | 4.9 | 普通咲 | 中 | 広楕円形 | 桃 | 有 |
| 初秋白桃 | 中 | 複 | 4.11 | 普通咲 | 中 | 広楕円形 | 淡桃 | 有 |

^z 2012~2013年の平均値

肉着色は無い。核周囲の着色は‘新白麗’と同様に強く、果皮の付着性はやや強い。(表3, 写真3)。

果実の大きさは340 g程度で、‘新白麗’や‘初秋白桃’よりやや大きい。糖度は、‘新白麗’より高く甘い。果汁の酸度は‘新白麗’よりやや高く、渋味は無い。肉質は‘初秋白桃’より軟らかく、ち密さは密で、果汁が多い。そのため、食味官能評価は‘新白麗’よりかなり優れる(表4, 6, 写真4)。

(4)結実特性

収穫期は、‘新白麗’より2日程度遅いが、‘初秋白桃’より14日程度早く、育成地(赤磐市)においては、8月下旬に収穫できる。日持ち性はやや良好で果肉は時間をおいても褐変しにくく、裂果は少ない。核の粘離は粘核で、核割れと生理的落果は‘新白麗’よりやや多い(表5、写真5)。



左：新白麗 中：岡山 PEH7 号 右：初秋白桃

写真4 果実の比較



写真3 ‘岡山PEH7号’の果実断面



写真5 ‘岡山PEH7号’の樹上における成熟果

表3 ‘岡山PEH7号’の果実特性

| 品種名 | 果形 | 果頂部の形 | 梗あいの深さ | 果肉 | | 核周囲の着色 | 果皮の着色 | 果皮の付着性 |
|---------|-----|-------|--------|----|----|--------|-------|--------|
| | | | | 色 | 着色 | | | |
| 岡山PEH7号 | 扁円形 | 平 | 深 | 乳白 | 無 | 強 | 微 | 中 |
| 新白麗 | 円形 | 狭浅凹 | 深 | 乳白 | 微 | 強 | 少 | 弱 |
| 初秋白桃 | 扁円形 | 狭浅凹 | 深 | 乳白 | 無 | 強 | 微 | 強 |

表4 ‘岡山PEH7号’の果実品質

| 品種名 | 果実重 ^z (g) | 糖度 ^z (Brix) | 酸度 ^z (pH) | 肉質 | | 渋味多少 | 食味 ^y 評価 | 果汁多少 |
|---------|----------------------|------------------------|----------------------|----|----|------|--------------------|------|
| | | | | 硬軟 | 粗密 | | | |
| 岡山PEH7号 | 335 | 17.0 | 4.9 | 中 | 密 | 無 | 中上 | 多 |
| 新白麗 | 263 | 15.2 | 4.6 | 中 | 中 | 少 | 下上 | 中 |
| 初秋白桃 | 285 | 15.6 | 3.7 | 硬 | 中 | 微 | 中下 | 少 |

^z 2012~2013年の平均値

^y 食味評価は下下~上上の9段階評価

表5 ‘岡山PEH7号’の結実特性

| 品種名 | 収穫期(月.日) ^z | | | 日持ち性 | 裂果多少 | 核の粘離 | 核割れ多少 | 生理的落果 |
|---------|-----------------------|------|------|------|------|------|-------|-------|
| | 始 | 盛 | 終 | | | | | |
| 岡山PEH7号 | 8.21 | 8.27 | 9.3 | やや良 | 微 | 粘 | 微 | 少 |
| 新白麗 | 8.19 | 8.25 | 9.2 | 中 | 無 | 粘 | 無 | 微 |
| 初秋白桃 | 9.5 | 9.10 | 9.19 | 良 | 微 | 粘 | 無 | 少 |

^z 2012~2013年の平均値

表6 ‘岡山PEH7号’ と基準品種との食味官能評価の比較

| 調査 品種 | 食味評価 ^z | | | | | | 総合 | 評価 ^y 人数 |
|----------|-------------------|------|------|------|------|-------|------|-----------------------|
| | 外観 | 香り | 甘味 | 酸味 | 渋味 | 硬さ | | |
| 岡山PEH7号 | 1.33 | 0.49 | 1.32 | 0.47 | 0.84 | -0.71 | 1.16 | 72 |

^z 基準品種(新白麗)を0とした-5(極不良)~5(極良)の11段階での相対評価
農林水産総合センター職員による評価の2012~2013年の平均値

^y 2012~2013年の合計

栽培上の留意点

本品種は、‘新白麗’に比べて果皮着色が少なく、果実品質も優れることから、岡山県特産の白桃系極晩生品種として普及が期待されるが、栽培に当たっては以下の点に留意する。

1. 岡山県内のモモ栽培地域で栽培可能で、特に果皮着色を抑えた有袋栽培に適する。
2. 果皮の着色は‘新白麗’より少ないが、幼果期に着色した果実は果実着色しやすいので、摘果時に取り除いてから果実袋をかける。
3. 年によって果実肥大の劣る小果が発生することがあるので、小果を確認したら早めに取り除く。
4. 成熟期が遅いため、台風やや蛾の被害を受けやすいので、防風対策を十分行い、防蛾灯などを設置して被害を少なくする。

命名の由来

本品種の名称は、岡山県が戦後育成したモモ品種のうち、7番目に育成されたことから、‘岡山PEH7号’と命名した。ローマ字表記は‘Okayama PEH7 go’である。

摘要

‘岡山PEH7号’は、岡山県農林水産総合センター農業研究所において育成された極晩生のモモ新品種で、その来歴及び特徴は次のとおりである。

1. ‘岡山PEH7号’は‘おかやま夢白桃’に‘白麗’を交雑して育成したモモ新品種で、2003年に交配を行い、同年秋に播種して育苗し、2004年に育種圃場へ定植した。その後、1次選抜試験で有望と判定されたため、2010年から‘岡山モモ11号’の系統名で

2次選抜試験を実施した。その結果、極晩生品種としては果実品質が優れ、果皮着色も少ない有望な系統と認められたことから、2014年2月に種苗法に基づく品種登録を出願申請し、2014年7月に‘岡山PEH7号’の品種名で出願公表された。

2. 樹の大きさは‘新白麗’同様に大きく、樹勢は強で、開花期は‘新白麗’よりやや早く、花粉を持っている。
3. 果実の大きさは、‘新白麗’より大きく、果皮着色は少ない。果肉は乳白色で、果肉着色は無い。糖度は‘新白麗’より高く、肉質はやや軟らかくて、ち密で、果汁が多いため、食味官能評価は‘新白麗’よりかなり優れる。
4. 収穫期は‘新白麗’より2日程度遅いが‘初秋白桃’より14日程度早く、育成地においては8月下旬となり、核の粘離は粘核で日持ち性がやや優れ、核割れや生理的落果は‘新白麗’よりやや多い。

引用文献

- 日原誠介・藤井雄一郎・笹邊幸男 (2012) モモの新品種 ‘さきがけはくとう’. 岡山県農業研報, 3:11-15
- 果樹研究所 (2007) 育成系統適応性検定試験・特性検定試験調査方法. pp73-96
- 岡山県立農業試験場 (1978) 昭和52年度種苗特性分類調査報告書 [モモ (毛桃)]. 267p.
- 笹邊幸男・藤井雄一郎・各務裕史・片岡正治・木村剛・紅谷文夫・平松竜一・依田征四 (2001) モモの新品種 ‘白麗’ の育成. 岡山農試研報, 19:25-27
- 笹邊幸男・藤井雄一郎・各務裕史・片岡正治・木村剛・紅谷文夫・平松竜一 (2005) モモの新品種 ‘おかやま夢白桃’ の育成. 岡山農試研報, 23:13-15
- 笹邊幸男・藤井雄一郎 (2008) モモの新品種 ‘新白麗’ の育成. 岡山農試報, 26:11-13

Summary

‘Okayama PEH7 go’ is a new peach cultivar released by Research Institute for Agriculture Okayama Prefectural Technology Center for Agriculture, Forestry and Fisheries. It resulted from the cross of ‘Okayama Yume Hakuto’ and ‘Hakurei’

in 2003.

This variety can be harvested at late in August in Okayama. The size and vigorousness of the tree is large. The blooming time is relatively early and pollen fertile. The fruit is large size with high sugar content. It has a good taste for dessert. The skin color is white and the flesh is milky white in color with red pigment around the pit. The physiological fruit drop and split pit is little. But paper bagging of fruit is necessary to obtain the white skin fruit.

It is highly recommended to grow this cultivar in areas like Okayama where the ‘white peach’ production is widely known in Japan.